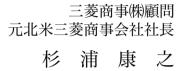


米国大統領選を前に 思うこと





現在、コロナ禍の対応に追われ、あまり大きく注目されることのない 米国大統領選挙であるが、9月のレイバー・デー(今年は9月7日)が 明けるとトランプ、バイデン両候補によるテレビ討論なども始まり選挙 戦は本格化する。人種差別に対する抗議行動とも相まった現下の未曽有 の危機の中、どちらが選出されるのか興味は尽きない。トランプ大統領 が再びAmerica Firstを連呼するかと思うと少々辟易するのは決して筆 者だけではないだろう。この標語を最も自分たちのものとして受け止め たのは、中西部ラストベルトを中心とする白人層であり、所謂グローバ リゼーションの流れに取り残されてしまった人たちだ。トランプ大統領 の岩盤支持層と言われている人たちでもある。それでは、彼らは何故取 り残されてしまったのだろうか。そこには弱者に対して非常に冷めた見 方をする米国政治の一面があるのではないか。選挙戦を前に少し歴史を 紐解きながら、そのことを考えてみたい。またそのことがコロナ後の世 界に何か示唆を与えるであろうか。

時はジョン・F・ケネディ大統領(在職1961~63年)の時期まで遡る。 当時は冷戦の最中である。ソ連との戦いに打ち勝つためには同盟国を含 む西側陣営を経済的に強くしなければならない。そのためケネディは、 安全保障の観点から、米国の市場を開放し、米国が世界の輸出品の吸収